

- 水稻収穫量調査については、統計値が生産現場の実感と乖離があるとの声が多くあることから、その要因を把握すべく、生産者の方々や生産者団体、地方自治体と意見交換を実施。10 a 当たり収量や全国の米の収穫量、作況指数等の統計値及びその取り方、公表の在り方について様々な意見を頂いたところ
- このうち、作況指数は、生産現場の実感との乖離の大きな要因であることが確認され、収穫量全体を平年と比べたものの認識が広くみられることから、統計に対する信頼性を確保するため、令和 7 年産からその公表は廃止する考え（現在、統計委員会で審議中）
- 引き続き、生産現場の実感に合い、精度の向上が図られるよう、必要な見直しを行う考え

【水稻収穫量調査の主な内容】

無作為で選定した調査ほ場で実際に刈取りを行い収量を把握

全国及び都道府県の「10 a 当たり収量」の算出

- ・ 収量基準：農産物規格規程3等以上、ふるい目1.70mm以上の玄米
- ・ 1.70mm及び農家が利用するふるい目での数値を公表

全国及び都道府県の

「米の主食用収穫量」

(10 a 当たり収量
(1.70mmベース)
×水稻作付面積)

全国及び都道府県の「作況指数」

$$\text{作況指数} = \frac{\text{10a当たり収量 (農家ふるい目幅ベース)}}{\text{10a当たり平年収量 (農家ふるい目幅ベース)}} \times 100$$

10 a 当たり平年収量は、直近30年間の収量の傾向値から算定。

生産現場の実感に合わせ、

精度を向上させ継続

- ・ 農家ふるい目ベースの収穫量を算出(1.70mmベースも引き続き公表)
- ・ 人工衛星や収量コンバインなどのデータの活用

公表の廃止

(現在、統計委員会で審議中)

- ・ 過去30年のすう勢で算定した平年収量との比較で実感と合わない、また収穫量全体が多いか少ないかを示したものの認識が広くみられるため廃止
- ・ 農家ふるい目幅ベースの10 a 当たり収量は引き続き公表

生産現場の実感との乖離の要因の例と見直しの方向 (検証を進め、その結果を踏まえ必要な見直しを実施)

① 作況指数

- ・ 作況指数は、過去 30 年のすう勢で算定した平年収量と比較した数値であるが、生産現場では前年や直近の収量と比較して作柄を判断
- ・ 収穫量全体が平年と比べ多いか少ないかを示したものであるとの認識が広くみられる
⇒令和 7 年産から公表の廃止（現在、統計委員会で審議中）

② 10 a 当たり収量及び米の収穫量

ア ふるい目

生産者は、品質向上を目指し、収穫基準のふるい目(1.70mm)より大きなふるい目(1.85mmや1.90mmなど)を利用しており、それにより選別したものが生産者の認識する収穫量
⇒収量基準となるふるい目を生産者が利用するふるい目に変更することの検討

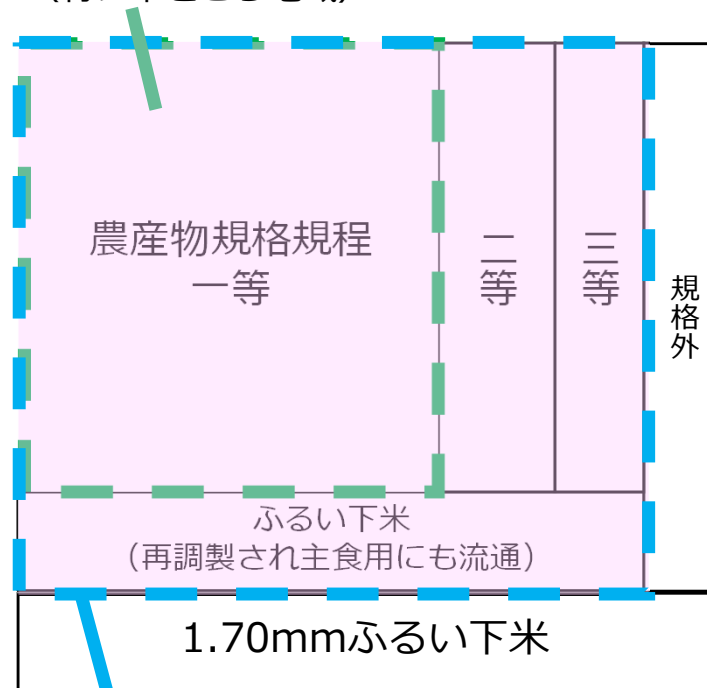
イ 気象災害等による影響

生産者は、高温障害による未熟粒の発生や、精米歩留まりの低下により、製品ベースでの収量の減少を実感
⇒情報収集の強化や、精度の向上に向けた人工衛星データや収量コンバインなどの新技術を活用した取組の検討

- 作況指数については、過去30年間の収量のトレンドである平年収量との対比であり、収穫量の出来不出来を直近年と比較する傾向の高い生産者・関係者の実感とのずれの大きな要因であることを踏まえ、主食用米の収穫量の出来不出来（作柄）は前年との対比で示すよう変更し、作況指数の公表を廃止。（現在、統計委員会で審議中）
- 収穫量調査におけるふるい目については、1.70mmから生産者の用いる1.80mm～1.90mmへの変更を検討。
- 1.70mmかつ三等以上については参考的に提供。

【現行の収穫量】

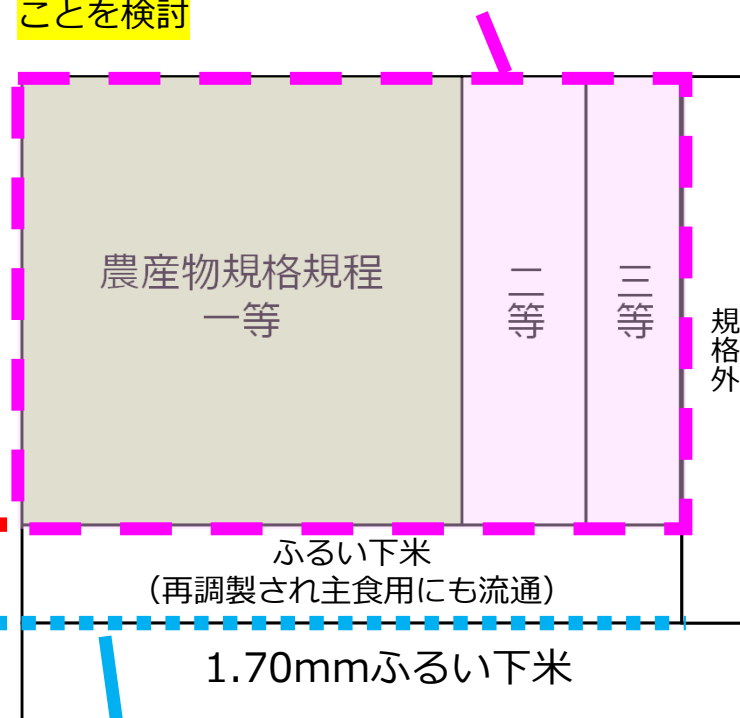
生産者が収量と認識しているのは、
生産者が使用するふるい目幅かつ一等
(特に米どころ地域)



収穫量調査では、主食用に供給される可能性のある米の総量を把握するため、ふるい目幅1.70mmかつ農産物規格規程三等以上を収量基準

【見直し後の収穫量（イメージ）】

収穫量調査においても、生産者が使用するふるい目幅に変更し、こうした情報なども提供することを検討



1.70mmかつ三等以上については参考的に提供

生産者ふるい目
(1.85mm等)

1.70mm

- 人工衛星のデータを活用した作柄予測については、令和2年産から導入しているが、収穫量を予測するには精度が確保されていないことから、積極的に知見を収集し、今後の導入に向け検討を進める。
- 収穫と同時に収穫量等の測定が可能な収量コンバインの導入が進められていることから、標本調査に加え、試行的に収量コンバインで収集された収穫量のデータを活用することを検討。

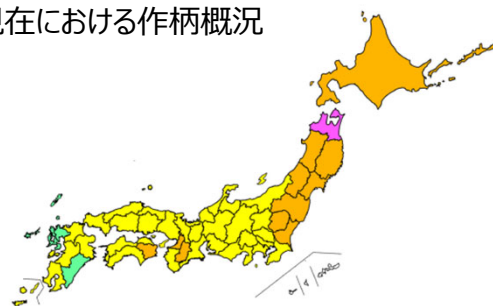
【新技術活用のイメージ】

水稻の作柄概況把握における衛星技術の活用

- ・人工衛星で把握する地表面温度や作物の繁茂状況などのデータを活用し、7月15日現在（西南地域の早期栽培のみ）、8月15日現在の水稻の作柄（良、やや良、平年並み、やや不良）を予測。

令和6年産水稻の8月15日現在における作柄概況

区 分	作柄の良否
	良
	やや良
	平年並み
	やや不良



9月25日現在以降に公表する10 a 当たり予想収量等への活用に向け検討してきたが、現行の実測調査を置き換えられるだけの精度がある取り組みはまだ見いだせていない。一方で、近年はAIの進展により様々な分野で活用が見られ、収量予測の分野でもAIと衛星データをかけあわせて収量を予測するといった新たな動きが見られるところ。今後の精度向上に向けて知見を積極的に収集し、検討。

収量コンバインのデータ活用を検討



収穫と同時に籾の重さや水分量等が測定される収量コンバインの導入が大規模な生産者を中心に進展。測定されたデータについて、調査結果の補完などへ活用できないか、今後の精度向上に向けて検討。